
Melancholic Gold

柳 すすたけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Melancholic Gold

【Nコード】

N2124T

【作者名】

柳 すすたけ

【あらすじ】

ブライダルフォトショップに勤めるリサは、ひとつの恋を終わらせられずにいた。

そんなある日、大学のメンバーから納涼線に誘われ、そこに『彼』が来ることを知り、サヨナラをするため参加することにする。

Colorful Dropsシリーズ、第1弾。

サヨナラのために

華やかな仕事場でタイムカードを切りスタッフルームに戻ると、チーフが書類をまとめていた。邪魔をしないように、あまり大きくない音量でリサは声をかける。

「お疲れ様でした」

「あら、リサちゃん、楽しんでらっしゃいね」

苦笑いを営業スマイルで誤魔化し、ロッカールームへ進む。ユニフォームを脱ぐと、纏っていた鎧を脱ぎ捨てたようで何とも心もとなしい気分になった。

それもこれも、きつとこの後の予定のせい。

「行きたくないなあ」

呟いてから盛大なため息をつく。鞆の中で携帯電話が震えているのに気がついた。小さなウィンドウを確認すると、これから会う同級生の一人からの電話。

「何？」

『あからさまにイヤそうね』

「まあね、でもちゃんと行くよ」

『知ってるわよ』

「でも、今からだどギリギリ乗船開始時間も」

『わかった、ミツに言っておくわ』

「先輩によろしく」

電源ボタンを押して通話を終了させると、重たく沈む心を叱咤して

立ち上がる。

「いつまでも逃げてたって仕方ないか」

ひとつのサヨナラのために、リサは仕事場を後にした。

複雑な再会

待ち合わせ場所に着くと、そこは人がごった返しているうえにすでに乗船が始まったため、なかなかメンバーを見つけることが出来なかった。

リサは携帯電話の着信履歴から、ユウに電話をする。

「もしもしユウ？今どこ？」

『リサ着いた？私たちは船の銅像の前ら辺にいるよ、まだ動いてない』

「あ、わかった、見えたよ」

『待ってるね』

言われたとおりに銅像に目を向けると、その傍に周囲よりやや浮いた集団が見えた。

人の波を掻き分けたどり着くと、そこにはすでに四人全員が揃っていた。

「リサ」

「ユウ」

ユウがリサに向かって両手を広げると、リサもユウに向かって両手を広げて抱きついた。

人目も憚らずにハグをする二人はれっきとした日本人だが、こうやって抱きしめあうのが二人の間で通例となっていた。

背が高く細身のりリサは出るところはきちんと出ているが、ロールアップの黒いカーゴパンツに七分袖グレーのパーカーとダークブラウンのショートカットが中性的な印象を与える。また、黒いグラ

デイエーターサンダルがカッコよさを演出し、さながら宝塚の男役
のようだ。

一方のユウは背は高いがリリサには一步及ばず、肉付きは程よくグ
ラマラス、ハッキリした目鼻立ちのドリーフェイスは実際より幼
い印象を与え、そこに黒地にマゼンダ色の大輪の芍薬が入った浴衣
が合わさり、妖しい魅力を放っていた。

「お前らってタトウみたいだな」

「ロシアの女性ユニット？」

「そうそれ」

「なに、ミツヤ先輩あたしにまでヤキモチ？」

「違うわ!!!」

「呆れてるんだよ、ここ、公衆の面前デスヨお二人さん」

「ああ、ユウスケいたんだっけ？」

「ひでえな」

「アヤちゃんも久しぶり〜、元気だった？」

自分もハグされるのでは、と身構えたアヤだったが、リサをそれ
察したのか苦笑するだけだった。

「大丈夫、アヤちゃんのカレシはものすごく嫉妬深いからハグし
ないよ」

「それ、俺のことか？」

「それ以外、誰がいる？」

ニヤリと笑って、リサはユウスケをからかう。ユウスケは「ひでえ
と言いながら、リサの肩からバッグを受け取るうと手を伸ばした。

「触らないで!!!」

ユウスケに触られたら、醜い感情が伝わってしまう。瞬間的にそう思ってしまったリサは反射的に手を払っていた。しまったとリサが気づいた時には、もう反応した後だった。

「ユウスケ、それリサちゃんの商売道具なんだから、そりゃ触らせたくないんじゃないか？」

ミツヤがやれやれといった風に、フォローを入れる。

「そうだろ？リサちゃん」

「はい。だから、ごめんね？ユウスケ」

「そうだよ、ってか、リサの荷物持つくらいならアヤちゃんの荷物もちなさいよ！！ねえ？」

「え？アタシですか？」

突然話を振られたアヤは驚いた顔をするが、すぐにユウスケを見上げて尋ねた。

「お願いしてもいい？」

「もちろん」

とびっきりの笑顔、という言葉が似合いそうな笑顔を見せると、ユウスケは巾着袋を受け取る。

そのまま手をつないで、動き出した列に合わせて前に進んだ。

ミツヤもユウが転ばないようにと、さりげなく背中を支えてステップを上らせている。

その後ろを、黙ってリサが続いた。

生暖かい海風が、リサの身体に纏わりついた。

薄っぺらな虚栄心

船内に入ると、客室に案内された。周りをよく見ると、スーツを着たサラリーマンや初老の男女のグループが多かった。

「私たち浮いてませんか？」

「アヤちゃんもそう思う？」

「ま、教授からもらったチケットだし、このフロアは接待や団体に使われる比較的大きい部屋が多いってことだな」

案内された部屋畳が敷かれた座敷で、すでにつまみとビールが用意されていた。

ユウは真っ先に窓から夜景の見える位置に座り、その隣りに自然にミツヤが腰を下ろす。その向かいにアヤが進むと、これもまた自然にユウスケが隣りに座る。

カメラバッグを下ろしながらどうしようかとリサが怯んだ瞬間に、ユウが声をかけた。

「リサー、今日はここ」

自分の左となりの座布団をバシバシ叩いてアピールする。その行動をミツヤがやんわりと窘めた。

「ユウ、食い物がある前で埃たてるようなことはしちゃだめだよ」

「だってリサが隣りに来ないんだもん」

「え？あたしのせい？」

「そつだよ」

「悪いリサ、つまみが埃かぶる前に座ってくれ」

「わかりました」

内心でユウに感謝しつつ、リサは言われた席に落ち着いた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

それぞれがプラスチックコップを片手に乾杯すると、各々の近況報告が始まった。

「そういえば、ユウと先輩ってこの間フランス行ったんですよ？」

「そうそう。有名なフォトグラファーの個展に行きたくてさ」

「婚前旅行じゃないんですか？」

「違うよおー!!」

「リサ、その手の話はユウにプレッシャーになるからやめてくれ」

「了解です、そういえばアヤちゃん髪型変えたんだね？可愛い」

「ホントですか！？ありがとうございます」

「今日の浴衣によく似合ってる」

「ユウスケが選んでくれたんです」

「へえ、さすが、そういう所は見る目あるよね」

ビールを口にしつつ、リサはアヤを眺めた。

ショートボブの黒髪と、勝気なのに垂れた目尻が少年ぽさを醸し出している。

紺地に薄いピンクの宵桜が流れる浴衣はボーイッシュな中の女性ら

しさをみせている。が、ユウのような色つぼさが無いのは、そこにあわせた白地に朱色のラインが入った帯があるからだ。

「色香がないのは男除けかあ、残念だったね、アヤちゃん」

「なあ、褒めてんの？ 貶してんの？」

「さあどちらでしょう？」

「そういえばお前はどうかなんだよ？」

「何が？」

「オトコだよ、オトコ、作んないの？」

仕返しとばかりに、ユウスケが問う。リサは内側に抱えたモヤモヤが暴れないことを祈りながらゆっくり息を吸ってから言う。

「…社会人はそんなヒマないんだよね、店に来る男性は皆将来の奥さん連れてるわけだし」

「ああそっか、上手いこと言うな、リサ」

「褒めてんの？ 貶してんの？」

「さあどちらでしょう？」

まったく逆の立場で口を尖らせながらリサが言うと、ユウスケはニヤリと笑って先ほどのリサの台詞を言った。

「そういえば、リサ先輩は浴衣じゃないんですね」

今気づいたとばかりに、アヤが聞いてきた。リサは口を尖らせながら答える。

「ギリギリまで仕事だったからね、あーあ、あたしも学生に戻りたい…！」

「そういや、お母さん調子どうだ？」

「今は落ち着いてるけど、定期健診で腫瘍が見つければまた手術だね」

「そっか、お前、がんばってるよな、俺だったら絶対無理」

「起きた事は仕方ないし、あたしが働けば妹は大学出られるから」

リサは自嘲気味に笑って一気にビールを呷ると、ユウスケを睨んだ。

「こんな話したら場のテンションさがるじゃん！なに考えてんの？」

「まあまあ、ビールをどうぞ社会人様」

「そうやってすぐ誤魔化す」

そのやりとりでミツヤが大笑いし、アヤはリサに引っ付いた。すると、船内が薄暗くなりまもなく花火大会が始まるというアナウンスが流れた。

ヒューウ…

ドオオオオン

予告アナウンス通り、小さく丸い窓の向こうに欠けた花火が上がった。

ユウがデジタルカメラを持ち窓際に行き写真を撮ろうと四苦八苦するが、上手く撮れないようですぐに振り返った。

「デッキに行こうよ」

「いいよ」

「アヤちゃんもどう？」

「行きます」

「じゃ、皆で行きますか」

その言葉に嬉々としてユウが廊下へ向かい、ミツヤが立ち上がりユウの巾着を右手にとって続く。

ユウスケが自分のデイバッグからアヤのデジカメを取り出し、「落とすなよ」と言って渡すと廊下へと促した。

リサはカメラバッグから一眼レフを取り出し、一番最後に部屋を出て最初に預かった鍵で施錠した。

生暖かい風が、重くりサに纏わりついた。

過去への告白

デッキはむわっとした夏特有の空気と人の多さで、思っていたほど涼しくはなかった。

ミツヤとユウスケが、気を利かせてドリンクを持ってくると言い出した。

「私レモンサワー」

「アヤは？」

「じゃあユウ先輩と同じで」

「了解」

「おつまみいる？」

「何でリサが行くんだよ」

「先輩もあんたも、手は二つしかないでしょうが」

「三つぐらい大丈夫だよ」

「ユウスケが大丈夫でも、万が一誰かに引っかけたら大変でしょうが」

リサはそう言っつて、自分のカメラをユウに預ける。

「ユウ、カメラよろしくね、それは趣味の安い奴だから何かあっても大丈夫だから」

「安心して、絶対落とさないから」

「信頼してる」

「じゃあ俺がおつまみ部隊になろう」

「え？いいんですか？」

「一応年長者なんで、女性一人で歩かせないってことで」

「ありがとうございます」

「つてわけでユウスケ、先にドリンクコーナー並んでてくれ」

「わかりました」

「いってきま〜す」

「いってらっしやい」

ミツヤが先に立ち、人並みを掻き分ける後ろをリサがついていく。十分距離が離れ人が少なくなったところで、ミツヤが切り出した。花火に近付いているのか、先ほどよりも音が一段と大きくなっていった。

「今日は悪かったな」

「何です？」

「聞こえないふりしやがって、ユウスケのことだよ」

「ああ、気を遣わせてすみません」

「いや、いいけど、こっちこそ悪かったと思ってな」

「わかってて参加したの私だし、それに、今日はサヨナラを言いに来たので」

「そうか」

「そうです」

「ところで先輩、焼き鳥と焼きソバ買っていていいですか？」

まっすぐ前を向いてミツヤと目を合わせなかったリサは突然顔を上げた。

その表情は片方の口の端を上げ、ニヤリと笑っているようにも、無理やり笑っているようにも見えた。

「お前、まだ食うのかよ」

「ここで夕飯食べて帰るつもりなんで、あ、二次会は出ませんよ？」

「ま、そうだよな、わかった、俺たちが奢るよ」

「やった〜!!!ご馳走様です」

つまみを右腕にぶら下げドリンクコーナーへ急ぐと、ちょうどユウスケが注文するところだった。

「レモンサワー二つとビール二つ、それと梅サワーを一つの計五つで」

「よく私のオーダーわかったね」

「お前、ビールは最初の一杯だけだもんなその後はだいたい梅酒だろ」

「あの苦味が苦手、ドイツのは飲めるんだけどね」

「贅沢な舌だなあ」

「リサはその辺の付き合い広いよな」

「美味しいもの開拓が好きなんです」

三人でドリンクを受け取って元の場所に戻ると、ユウとアヤが見知らぬ男たちに囲まれていた。

アヤが必死に抵抗して大きな声を出していた。

「やめて下さい!!」

「彼氏がいるんでお断りです」

「いいじゃん二人ともさあ、ちょっとだけだから」

「カレシ戻ってくるまででいいからさあ、ちょっとあっちで飲もうよ」

その姿が目映った瞬間、ユウスケの雰囲気が一変した。それを感じ取ったりリサは重い風を感じながら言った。

「ドリンク持つてるよ、貸して」

プラスチックカップを二つ差し出され、リサは器用に受け取った。ユウスケは周囲の気温を下げる雰囲気でアヤたちに近付いた。

「先輩も行かないと、ユウが一人になってナンパヤローに拉致られますよ」

「悪いな」

「いえいえ」

リサはおどけた口調でミツヤを睨けると、ミツヤも鋭い眼差しを見知らぬ男たちに向けたまま返しそのままユウを救出に向かった。

ユウスケはアヤの背中に手を沿え自分のものだとかからさまに主張し、ミツヤはユウにドリンクを渡し空いた腕にユウをしがみ付かせ見知らぬ男たちから引き離れた。

突然背後から現れたユウスケとミツヤの纏う空気に男たちは恐れおののき、その場で固まったまま四人を見送っていた。その姿に苦笑しつつ、リサは止めとばかりに声をかける。

「お兄さんたち、ちょーっと相手が悪かったね、他の子あたったら？」

リサに声をかけられ我に返った男たちはそそくさとその場を後にした。

「ドリンクお待たせ」

「結局リサに持たせちゃったな」

「お気遣いなく、はい、アヤちゃんの」

「ありがとうございます」

ヒュウウウウー…

ドンドオオオオン

アヤにドリンクを渡した時、赤い花火が数発打ちあがりデッキの上を赤く染めた。
赤く染まったアヤの顔を見ていられず、リサはすぐにユウに向き直る。

「四人の写真撮るからカメラ返して」

「はい」

「ありがとう、ほら皆固まんよ」

手で集まるようなジェスチャーをして四人を集合させると、リサはファインダーを覗いた。

ヒュウウウウー…

ドンドオオオオン

色とりどりの花火が上がったタイミングを見て、シャッターを切る。連写して何枚か撮って、ディスプレイで確認してからOKサインを出す。

「どんなの出来た？」

「出来てからのお楽しみ」

片方の口の端を上げニヤリと笑うリサを見て何かに気づいたユウは、ミツヤに声をかけた。

「ミツー、私も写真撮りたいから巾着返して」

「ほら」

「ん、アヤちゃんも撮りに行かない？」

「え、でも…」

「ほら、いいからいいから、課題の練習にちょうどいいでしょ？」

「二人だけだとまた絡まれるぞ」

「ミツも一緒に来て」

「わかったよ」

アヤとミツヤの手をぐいぐいと引っ張って、ユウは手すりの近くへ移動した。その様はまるで、大人を引っ張ってはしゃぐ子供の様だ。ユウの勘の鋭さと優しさに感謝しつつ、どう切り出そうと考えながら梅サワーを口にした。

「…俺さ」

「うん？」

「卒業したらアヤ連れて田舎に帰ろうと思っただ」

「写真やめちゃうの？」

「芸術的な写真ばかり求めてたら食っていけないからな、いつまでも親元離れてフラフラしてられないし」

「そっか」

「でもアヤが承諾しない」

「なんで？」

「本当は違う人を連れて行くつもりだったんじゃないかって、何考えてんだか」

「それだけ？」

「他にも、女の子全員に優しいんじゃないか？とか、違う人が好きなんじゃないか？とか言われてさ」

「うん」

「止めが優柔不断だって、俺、そんなに優柔不断か？」

「それ、あたしのせいだね」

「は？」

「女の子全員と違う人って、多分あたし個人を指してるんだと思うよ」

「なんでだよ？」

「さっきドリンク渡す時にすごい顔で睨まれた」

赤く染まったアヤの顔を思い出して、リサは自嘲的な笑みを浮かべる。そう、あれはまるで般若の面のような迫力があつた。

「ああ、嫉妬されてるんだなって思った」

「リサ」

ユウスケが悲痛は面持ちで声をかけるが、リサはユウスケの方を向くことは出来なかった。

「あたしさえ、大学にいた頃ユウスケのこと好きだったよ」

先ほどから纏わりつく生暖かい海風が、少しでも鎧になればいいと思いつながらリサは続ける。

「でも、今、ユウスケはあたしの隣りにいないから」

青い花火が上がり、あたり一面を青く染める。どこからか「玉や」と興奮した声が聞こえてくる。

「あの時、ユウスケはあたしを選ばなかったから」

「だから……」

「サヨナラを言いに来た」

ユウスケに振り向いたりリサの顔は、金色に染められていた。

物思いに沈む金色

まっすぐ向けられた瞳は、見えない鎧で守られているかのようにユウスケに感情を読むことを許さなかった。

花火大会はクライマックスを向かえ、大輪の菊が絶え間なく空に咲く。

「なんつー表情してんの」

ユウスケの眉間には皺がくつきりと浮かんでいる。フツツと、リサにしては珍しい控えめな笑みをこぼした後、真顔になって続けた。

「あの時ユウスケが答えなかったのは、仕方の無いことだと思う」

「一人で立っていられなくて、恋愛じゃなくて依存できる相手を探してたんだと思うから」

先ほどまで生暖かく感じた海風が、今は心地よく感じる。もう少しだけ風が止まない様に、心の中で見えない何かに祈る。

「だから、あたしに後ろめたいとか申し訳ないとかって心を残して甲斐甲斐しく世話するのはナシ、おわかり？」

おどけた口調で肩を竦める。その仕草は、リサが好きなハリウッド映画のキャラクターのものまねで、大学時代はよくやっていたのだ。ユウスケは自分が考えていたよりもずっと真っ直ぐに立っているリサを見て、自分の考えが恥ずかしくなる。まさかアヤがそんなことを考えているとは思わなかったし、当の本人であるリサに指摘され

るとは微塵も思わなかったのだ。
自分の愚行に言葉が出ず行動できずにいるユウスケを見かねて、リサはトンと背中を押した。

「ホラ、はやくアヤちゃんのところに行ってプロポーズでもしてくれば？」

尚も何か言い募ろうとするユウスケの背中をグイグイ押して、リサはユウスケを拒絶する。

早く、早く、風が止まないうちに。剥がれそうな鎧の中でリサの心が叫ぶ。

その必死な様子に、ユウスケは先ほどは強固だと思えたりサの見えない鎧が揺らいでいるのを感じ取った。

「サンキユ、それと、ごめんな」

頭に一回ポンと手をやって撫でる。リサが好きだったユウスケの癖。その後ユウスケはリサに目を合わせることなく、真っ直ぐにアヤの元へ向かう。

最後の最後で必死になって纏っていた鎧が剥がれて、リサは思わず叫んでいた。

「ユウスケ！！」

振り返ったユウスケの表情を、リサは歪んだ自分の視界の代わりにファインダーに収めた。

ユウスケは一瞬驚いたが、すぐに向き直るとアヤの元へ向かう。

気がつけば風は止んでいて、今日で一番綺麗な金色の菊の様な花火が空に咲いていた。

相変わらず、リサの周囲では人々が家族連れの子供が興奮したり、寄り添った恋人が感嘆したりしていたがリサはもう気にならなかった。少しだけ、金色に染まったこの空間で一人物思いに沈みたかったから。

物思いに沈む 金色

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124t/>

Melancholic Gold

2011年5月17日21時46分発行